

木洩れ日拾い

天野 忠



不洩

日拾い

ノア叢書…11

木洩れ日拾い

一九八八年七月一五日第一発行

一九八八年九月一五日第二刷発行

著 者 天野 忠

発行者 澗沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市淀区中津三一七―五

電話〇六(三七三)三六四一

振替大阪四―三〇六四五七

印刷製本・亜細亜印刷

©1988 Tadashi Amano

0095—8810—7641

定価一八〇〇円

不良本はお取り替えます

木洩れ日拾い・目次

I

幽霊 10

ひらかな通信 15

古い映画の味 21

竹騒動 25

顔 30

夢のあとさき 35

老い盛り 40

ゆりかもめなど 45

伴侶 50

仏壇のこと 55

水平にして 60

暑中日記から 65

こぼれ梅 70

ある風景 74

日記帖のこと

78

山莊行 83

老友 88

小動物 93

子供たち(一) 98

夏の手紙 103

好日 108

雨降り 113

饅頭のこと 118

子供たち(二) 122

歩きながら 127

Ⅱ

捨てる 134

しんきがる 136

うぐいす	139
バスの中	141
さびしい動物	144
茶の間の小鳥	146
酒の恨み	148
夢の材料	151
記憶からのたより	153
もみじのような言葉	156
今日様のこと	158
路地暮らし	161
茶の間の郷愁	163
蟬のように	166
本を読む人	168
沖縄の海の色	170
渾たらしの時代	173

飾り窓の中	175
楽しい木	178
退廃のこと	180
昔の傷	182
手紙など	185
古い鳥	187
三十五年前	190
年末閑散	193
心不全	195
ポストなど	197
老人の菓子	200
鹿を見に行く	202
懐かしい言葉	204
ニチェボ	207

Ⅲ

二つの顔

212

善人の死

215

桃の木

218

愛誦の人

223

人の景色

新参者

228

能面

230

勝手口

232

エイプリル・フール

233

異邦人

236

四二会

237

*

年譜

241

あとがき

249

木洩れ日拾い

——一九七五—一九八七

カバ！・扉装画 栗津謙太郎

幽霊

詩を書くということ、ときどき「いつごろ詩作をするのか」と聞かれることがある。いつごろといわれても、目下の私は失業老人なので、いたって閑散として一日中手持ち無沙汰の極みなので、「詩作」ということになる。とまるまる一日中ということになるのだが、そうはいかない。そういうわかれて、それらしきものに見当をつけてみると、どうやら朝眼が覚めて——いつからとなくぼやーとした感じの眼ざめで、若い人のようにパッと眼がさめるといふ爽快感はさらに無いのだが——その三分の二ほどさめていて、あとの三分の一ほどの部分の無我の如き曖昧な情緒の中で、何となくふのりを溶かしたような状態の網の目から、ときどきおかしいなヒントが洩れ出てくるときがある。作品が五つあるとしたら三つまでが、そんなとりとめのないときの産物である。

眼をパッチリ開いてからは、反ってロクなものがない、というのも可笑しい話で、どういう理屈でそうなるのか、私の場合、探るでもないようである。正味起きてしまっただけから、つまり

淨机端座して沈思黙考、想念をめぐらして工夫專一というような工合にはいかない。謂わば不真面目型曖昧模糊派の怠惰な私の生活心情がなせるわざかも知れない。

この間も、私より年長の知人が「十二、三年前、私は幽霊を見ました」と大変真面目な顔で話されたのを聞いたが、その話が一週間ほど耳の底に、糊でぶ厚い何かカタクリ粉のようなものをくっつけられたような変な感じで残っていた。この年になるのに、夜中に小用に起つのが、サツというふうに立てなくて、何となくもじもじとふんぎりのつかぬような、気持ち悪さ居心地悪さを感じていたが、それがさっきいった三分の一の半睡半覚の如き状態の網目にひっかかっても、がいているのと同じ気分であった。そのときは、半時間ほど、そのおかしな落ち着かぬ想念のかたまりを、自分の手でいじくっていて、すっかり起き出してから、朝食の前に、一度ムダ書きした紙の裏に「幽霊」という題で心おぼえだけを書いておいた。あとは何日もかかって、割合と自分なりにスッキリと「幽霊」が言葉の枠組みの中におさまってくれたように思えたが、そのかげんでは、その晩から夜中の小用にサツと起ち上がれることが出来た案配で、われながらおかしかった。

ここでその幽霊の話になるのだが、そのMさんの話では、夕方、それも夏の夕方で、まだまだ人の顔も物の姿もそれなりにはつきり見える時刻であったそう。駅から自分の家の方へ、すつきりと人家のない場所なのだが、といってことさら物寂しいとか薄気味悪いという程のことな

い所を歩いていくと、うしろから、いきなり、かぼそい子供の声で「おっちゃん」と呼ばれた。「何や」とびっくり顔で振り向くと、十歳位のほっそりした女の子が、しょぼんと草っ原の中に立っている。三十メートルほど離れた道の向こうに、ぼつんと一軒立っている小さい家の方を向いて「お家へ行きたいのに行けへん」と哀しそうに言う。足でも怪我して歩けへんのか、とたずねると、ぼんやり頭をふる。おかしな子やな、そんなら、おっちゃんが負ぶって連れて行ってやろ、と近づくと、うすい暖簾が風に吹かれてうしろに下がるように、ふわーっと足の方から退いていつて消えて見えなくなった。なんにもない。そこで初めてゾーッとしたというのである。後をも見ず無我夢中の恰好で走って、気がついたら自分の家の玄関のたたきに座っていたそうである。

何でも、そのへんには、以前遠国から来た農民の人達の部落があったが、氣候不順からの不作つづきやら、伝染病やらで一軒減り一軒つぶれたようになったところで、何にもないただ草ぼうぼうの荒地に、しがみつくように残って頑張っていた一軒も、長雨つづきの洪水で押し潰されてしまった由である。

「しかし、たしかあのとき、女の子の見ていた方角に一軒ボツンと農家があったのを私も見た気がしたんやけどなあ」まだあたりが明るかったのに、その家にはぼーっと燈がついていたような気がする、ともMさんは言い添えた。

その十歳ばかりの女の子の幽霊が、いまアメリカのコロラドの田舎にずうっと居て、いつころに帰って来ない私達の孫娘の十歳になったばかりのイメージと重なって、どうにもそのころしばらく切ないような気分でひっかかっていたようである。

幽霊の顔は、Mさんの表現では、ただ十歳位のほっそりした女の子という漠とした雰囲気だけののだが、その漠とした形の上にうちの、たしかにほっそりした心細げな孫娘の顔を、ふっと置いてしまったのだろう。「お家へ行きたいのに行かれへん」は「帰ろうと思っても帰れへん」と訴えるかぼそい女の子のとりとめのない声にかぶさり、「日本へ早う帰って元気な顔を見せて欲しい」と思い念じているじいさんばあさんの願望がそれにひっかかったみたいである。

それはそうとして、現実にはMさんのいう「あのあたり」は、例の土地開発ブーム、草っ原どころかニョッキニョッキとガレージ付きのマイホーム文化住宅（もうこんな言葉も古臭くなったか）がいっぱい、赤や青のひかる屋根を連ねて、今は、夢の何とかランドとか称して大都市のベッドタウンになっているそうである。団地もあり学校も出来、スーパーも公園も出来、スナックとかパブとかいうのも定式どおりちゃんと揃ったふうであるらしい。かぼそい幽霊が、しょぼんと立つさまもないくらいという話である。作品の上で、そこへ強引に私はトルコ風呂を持ってくることにした。これは例の三分の一ほどの、曖昧な情緒の中の産物である。あとはそっくりMさんの話どおりにした。コロラドの田舎の孫娘とダブらせた、ほっそりと心細げな十歳の幽霊娘もそ

のまま。

ほんとうの幽霊は、荒地に立ったベッドタウンの、私の想像の中のトルコ風呂だったかも知れない。